

## 過去の地震から知る、未来の備え ～本当に人は助けてくれるのか

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切です。

ここでは、過去の地震、特にこの地域で2306人の死者を出した「1945年三河地震」で一体何が起こったのかを紹介していきます。今回は「救助」がテーマです。

■隣のおばあさんが生き埋めになっていた。私は必死になって瓦をはがした。道具がない、素手でやるしかなかった(明治村西端集落(碧南市湖西町)・原田さん)

わたしはやっとの思いで家からでると、すぐ近くから「助けてくれ」って声がきこえるだね。それが隣のおばあさんで、家の下敷きになっていた。近くを見ても誰もいない。まわりの家も多くが倒れていてね。亡くならした人も多かった。それで、私は1人で必死になって瓦をはがしておばあさんを助けました。道具がなくて、素手でやるしかありませんでした。

■隣の家が火事になり、生き埋めになった少女が助けを求めていた。しかし、周囲の全ての家が全壊していて、何もできなかった。(櫻井村藤井集落(安城市藤井町)・富田さん)

傾いた家から出て「ああ、すごいひでえことになったな」と。そうこうしとるうちに、すぐ隣で火の手が上がった。その女学生が足だけ挟まって「助けて、助けて」って悲鳴上げとるんだけど、自分のうちでもみんな死者が出て下敷きになっとるもんだし、道もガレキでふさがっていて、だれも助ける人がない。ほいでかわいそうに火にまかれて死んでしまったんだね。



絵 阪野智啓



絵 藤田哲也

救助には「地域での助け(共助)」が大切です。しかし、周囲の被害によっては「誰も助けに来てくれない」という現実があります。「自分の家を耐震補強してつぶれないような家にする」ことが最重要です。

そして、近所つぶれてしまった家がでたときを考え、地域で平時から「救助体制」を整えて「救助のための道具」を備える。さらに「道具を備えている場所」を知っておくことも重要です。万が一、自分の家がつぶれてしまったときに「助け出してもらえ」という備えにつながるからです。

阪神・淡路大震災では「誰にも気づかれず助けてもらえなかった」1人暮らしの高齢者の方がいました。そうした人を地域で出さないためにも、平時からのそなえは大切なのです。